

横浜商科大学新入学者を対象とした ICT リテラシ調査と利用動向に関する分析

遠山 緑生[†] 土本 康生[†]
横浜商科大学 商学部[†]

1 はじめに

2014 年以降、横浜商科大学では新入生を対象に PC やスマートフォンの利用経験などの ICT リテラシに関する総合的なアンケート調査を実施してきた。また、2014 年度よりノート PC の斡旋販売と必携化を行った上で、2015 年度以降の新カリキュラムでは BYOD によるノート PC を前提とした徹底した PC 活用をうながす初年次・二年度向け必修科目のカリキュラムを設計した[1]。このような施策を進める上で、本学新入学者の ICT リテラシに関する意識・実態の調査を初年次の必修科目内で四年間に渡り実施した。

著者らの主たる問題意識には「学生の PC 離れ」がある。スマートフォンなどの普及につれて、学生の ICT 利用経験が旧来型の PC ベースのものでなくなりつつあり、どのような位置づけでノート PC 導入や教育を行うべきか、ここ数年悩まされてきた。一方で、ビジネス系の実学教育を教育上の使命とする本学は、ビジネスにおける基本的な PC 活用ができる ICT リテラシの高い学生を社会に送り出す必要がある。つまり、学生の意識と卒業生に求められる能力のギャップをどのように埋めるかが教育内容の設計において重要な点になる。

本稿の議論は、このようなギャップを埋めるための基本的な情報として、実施したアンケートの代表的な設問に対する回答結果とその分析を示すものである。

2 調査方法

2.1 回答者

アンケートの回答者は、横浜商科大学商学部的一年生（定員 300 名）である。

2.2 調査方法

2014 年から 2017 年にかけて入学直後の学生に対し、必修授業における課題としてアンケートを実施した。そのため、回答率は 90%以上であった。ただし、2016 年のみ春学期の最後の授業での調査となった。調査は Google Forms を用いて実施した。

2.3 調査項目

基本的な項目として、PC に対する苦手意識、スマートフォンと PC のどちらを使いこなせている

か、スマートフォンと PC とどちらを使う方がより早く文字を入力できるかを調査した。

また、家庭において自由に使える PC が存在したかどうかに関する設問を設定した。2017 年度からは、高校における科目「情報」の履修状況を調査するため、受講した学年も問うこととした。

3 調査結果

3.1 PC に対する苦手意識の調査

図 1 に示すように、2014 年度の調査開始時はわずかではあるが 11.8%の学生が PC に対して得意だと回答した。しかし、3 年後の調査では 4.9%となり、得意だと回答する学生が半減した。また、非常に苦手と少し苦手と回答した学生は、2014 年度の段階で 76.4%だったものが 85.2%へと増加した。PC に対する苦手意識は増加傾向にある。2016 年度は一時的に苦手意識を持つ学生が減少しているが、これは 2016 年度の調査時期が半年間の学習後であったため学習により苦手意識が払拭されたものと推察される。

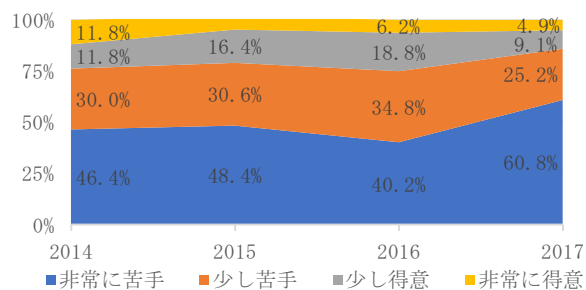


図 1 PC に対する親和度

3.2 得意な ICT 機器

近年の大学新入生は入学当初からスマートフォンの所有が 100%に近く、学生は日常的にスマートフォンを触っている。その結果、図 2 に示すようにスマートフォンと PC のどちらが得意かを聞いた場合、スマートフォンを使う方が得意だと回答した学生は 69.1%に上った（2014 年度）。また、この設問についても PC よりもスマートフォンを使う方が得意だと回答する学生はわずかではあるが増加傾向にある。なお、2016 年度に PC が得意な学生が増えたのは、3.1 と同様、調査実施時期が半期経過後のためと考えられる。

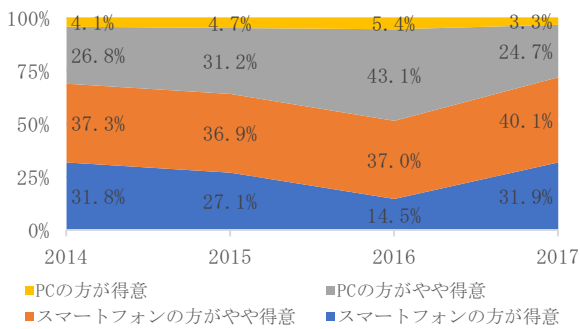


図 2 得意な ICT 機器

3.3 文字入力

PC を忌避する理由の一つに文字入力に対する嫌悪感があると考えている。そこで得意な入力方法を選択してもらった。想像通り、キーボード入力に対する苦手意識は高く、スマートフォンを利用した文字入力を望む学生が圧倒的に多い。なお、この設問は 2014 年度には実施していない。

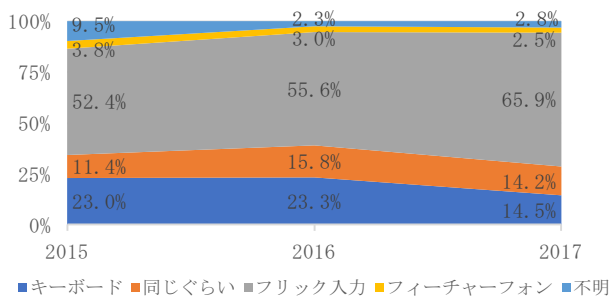


図 3 得意な文字入力方法

3.4 高校時代の PC 利用経験

数年間のアンケート結果から、そもそも大学入学前の PC 利用経験が非常に薄い層がいることが明確になってきた。特に近年、家庭においては PC 保有率が減る傾向にあると考えられるので、2017 年度からは入学前の PC 保有状況について聞き、あわせて高校における情報分野の履修状況も調査することにした。

図 4 に「大学入学前、家に PC はありましたか?」という設問の結果を示す。選択肢は、「1. 家庭には過去一度も PC がなかった」「2. PC があったが、数年前から使える状態ではなかった」「3. 家族共用の PC があったが自分が自由に使えるわけではなかった」「4. 家族共用の PC があって自分が自由に使うことができた」「5. 自分専用の PC があった」「6. その他」の 6 通りである。

図 4 に示したように、332 名中の 109 名、約 33% の学生は、回答 1~3 である。この場合、家庭では PC を自由に使える状況になかったことになる。

これらの学生は、入学時の PC 必携ルールに伴って購入するまでは、自分が自由に使える PC を所有していなかったと推察される。

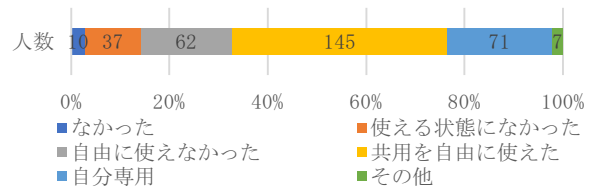


図 4 高校時代の家庭における PC 設置状況

また、紙面の関係でグラフは省略するが「高校で科目「情報」を、何年生の時に受講しましたか?」という設問については、332 名中 135 名、約 41% は「高 1 のみ」という回答であった。

さらに両質問のクロス集計を行った結果、<高校における科目「情報」の受講が高 1 のみで、大学前に家庭に自由に使える PC がなかった>層の学生が、332 名中 49 名（約 15%）存在することがわかった。これらの学生については、高校が他教科や課外活動で PC を積極的に使う機会を提供しているか、共用 PC 等を自分で積極的に使わない限り、高 2 以降の少なくとも 2 年間は、ほとんど PC の利用経験がないことになる。PC を 2 年以上も使っていないとすれば、リテラシの低さや苦手意識の強さも当然であると言える。

4. むすび

2014 年度から横浜商科大学の新生を対象に ICT リテラシの現状を調査した。その結果、この時期に入学した学生は PC を使うよりもスマートフォンを使う方が得意であり、年を重ねるにつれその傾向は強まってきた。この年代に入学した学生の PC 離れは事実であり、ICT リテラシを持った学生を育成する大学として、この傾向を踏まえた教育内容を設計する必要がある。

また今後、同様の調査を横浜商科大学以外の大学に広げていく計画であり、2017 年度は東京農工大学の三島和宏助教の協力を得てアンケートを設計・実施した。また類似の調査を嘉悦大学でも実施した。この流れを拡大し、今後大学間比較を行うことで、日本における大学新生の ICT リテラシの現状を調査し、大学における ICT 教育の改善に貢献したいと考えている。

参考文献

[1] 遠山緑生他：ICT リテラシー教育を埋め込んだ社会人基礎力プログラムの設計と実践，研究報告教育学習支援情報システム (CLE)，2016-CLE-18，3，pp1-7，2016-01-30